

# ひふみ神示 第四卷 天つ巻 全卅帖

## 第一帖 (一〇八)

二二は晴れたり日本晴れ、二二に御社してこの世治めるぞ。五大州ひっくり返りてゐるのが神には何より気に入らんとぞ。一の大神様まつれ、二の大神様まつれよ、三の大神様まつれよ、天の御三体の大神様、地の御三体の大神様まつれよ、天から神神様御降りなされるぞ、地から御神神様おのぼりなされるぞ、天の御神、地の御神、手をとりにてうれしうれし御歌うたはれるぞ。㊦の国は神の国、神の肉体ぞ、汚してはならんとぞ。八月の三十一日、一二のか三。

## 第二帖 (一〇九)

これまでの改造は膏葉張りざから、すぐに元にかへるのぞ。今度は今までになり、文にも口にも伝えてない改造ざから、臣民界のみでなく 神界もひつくるめて 改造するのざから、この方らでない、そこらにござる守護神さまには分らんぞ、九分九厘までは出来るなれど、ここといふところでオジヤンになるであろうがな、富や金を返したばかりでは、今度は役に立たんとぞ、戦ばかりでないぞ、天災ばかりでないぞ、上も潰れるぞ、下も潰れるぞ、つぶす役は誰でも出来るが、つくりかためのいよいよのことは、神神様にも分りては居らんぞ、星の国、星の臣民今はえらい気張り様で、世界構うやうに申してゐるが、星ではダメだぞ、神の御力でないと何も出来はせんぞ、八月三十一日、一二 ㊦。

## 第三帖 (一一〇)

一日のひのまにも天地引繰り返ると申してあるがな、ビックリ箱が近づいたぞ、九、十に気付くと、くどう申してあるがな、神の申すこと一分一厘ちがはんとぞ、ちがふことならこんなにくどうは申さんとぞ、同じことばかり繰り返すと臣民申して居るが、この方の申すことみなちがってゐることばかりぞ、同じこと申していると思ふのは、身魂曇りてゐる証拠ぞ。改心第一ぞ。八月三十一日、一二 ㊦。

## 第四帖 (一一一)

この方は元の肉体のままに生き通しであるから、天明にも見せなんだのぞ、あちこちに臣民の肉体かりて予言する神が沢山出てゐるなれど、九分九厘は分りて居れども、とどめの最後は分らんから、この方に従ひて御用せよと申してゐるのぞ。砂糖にたかる蟻となるなよ。百人千人の改心なれば、どんなにでも出来るなれど、今度は世界中、神神様も畜生も悪魔も餓鬼も外道も三千世界の洗濯ざから、そんなチョロコイ事ではないのぞ。

ぶち壊し出来ても建直し分かるまいがな。火と水で岩戸開くぞ、智恵や学でやると、グレンと引繰り返ると申しておいたが、さう云へば智恵や学は要らんと臣民早合点するが智恵や学も要るのぞぞ。悪も御役であるぞ、この道理よく腹に入れて下されよ。天の神様地に降りなされて、今度の大層な岩戸開きの指図なされるのぞぞ、国々の神神様、うぶすな様、力ある神神様にも御苦労になっているのぞぞ。天照皇大神宮様初め神神様、あつくまつりて呉れと申してきかしてあるがな、神も仏もキリストも元は一つぞよ。八月三十一日、ひつ九の㊦。

## 第五帖 (一一二)

牛の喰べ物たべると牛の様になるぞ、猿は猿、虎は虎となるのぞぞ。臣民の喰べ物は定ってあるのぞぞ、いよいよとなりて何でも喰べねばならぬやうになりたら虎は虎となるぞ、獣と神とが分れると申してあるがな、縁ある臣民に知らせておけよ、日本中に知らせておけよ、世界の臣民に知らせてやれよ、獣の喰ひ物くふ時には一度神に献げてからにせよ、神から頂けよ、さうすれば神の喰べ物となって、何食べても大じょうぶになるのぞ、何もかも神に献げてからと申してあることの道理よく分りたであるがな、神に献げきらぬと獣になるのぞ、神がするのではないぞ、自分がるのぞと申してあることも、よく分りたであるがな、くどう申すぞ。八から九から十から百から千から万から何が出るか分らんから神に献げな生きて行けん様になるのぞが、悪魔にみいられてある人間いよいよ気の毒出来るのぞぞ。八月の三十一日、ひつくのか三。

## 第六帖 (一一三)

天は天の神、国は国の神が治らすのであるぞ、お手伝ひは <sup>あめ</sup>あるなれど。秋の空のすがすがしさが、グレンと変るぞ、地獄に住むもの地獄がよいのぞ、天国ぞぞ、逆様はもう長く <sup>いきがみ</sup>つづかんぞ、無理通らぬ時世が来たぞ、いざとなりたら残らずの活神 様御総出ぞぞ。九月の一日、ひつくのか三。

## 第七帖 (一一四)

二二は晴れたり日本晴れ、二本のお足であんよせよ、二本のお手手で働けよ、日本の神 <sup>ふじ</sup>の御仕組、ひつも二本となりてるぞ、一本足の案山子さん、今更何うにもなるまいが、一本の手の臣民よ、それでは生きては行けまいが、一本足で立てないと、云ふこと最早分りたら、神が与えた二本足、日本のお土に立ちて見よ、日本のお手手打ち打ちて、神おろが <sup>かかし</sup>

めよあめつちに、響くまことの柏手に、日本の国は晴れるぞよ、二二は晴れたり、日本晴ふじれ、二二は晴れたり、岩戸あけたり。九月一日、ひつ九のか三。

## 第八帖（一一五）

あらしの中の捨小舟と申してあるが、今その通りとなりて居ろうがな、何うすることも出来まいがな、船頭どの、苦しい時の神頼みでもよいぞ、神まつりて呉れよ、神にまつはりて呉れよ、神はそれを待つてあるのざぞ、それでもせぬよりはましぞ、そこに光あらはれるぞ。光現はれると道はハッキリと判りて来るのぞ、この方にだまされたと思うて、言ふ通りにして見なされ、自分でもビックリする様に結構が出来てるのにビックリするぞ。富士の御山に腰かけて、この方世界中まもるぞ。かのととり、結構な日と申してあるが、結構な日は怖い日であるぞ。天から人降る、人が天に昇ること、昇り降りていそがしくなるぞ。てんし様御遷り願ふ時近づいて来たぞよ。奥山に紅葉ある内にと思へども、いつまで紅葉ないぞ。九月の二日、ひつく①。

## 第九帖（一一六）

ひふみの秘密でひらき鳴る、早く道展き成る、世ことごとくにひらき、世、なる大道で、神ひらき、世に神々満ちひらく、この鳴り成る神、ひふみ出づ大道、人神出づはじめ。九月二日、ひつぐのかみ。

## 第十帖（一一七）

一二三の裏に〇一二、三四五の裏に二三四、五六七の裏に四五六あるぞ、五六七すんだら七八九ぞ、七八九の裏には六七八あるぞ、八九十の御用もあるぞ。だんだんに知らずから、これまでの神示よく心に入れて、ジツとして置いて呉れよ。九月の三日、ひつ九のか三。

## 第十一帖（一一八）

この神示言波としてよみて呉れよ、神神様にもきかせて 呉れよ、守護神どのにも聞かして呉れよ、守護神どのの改心まだまだであるぞ、一日が一年になり百年になると目が廻りて真底からの改心でないとお役に立たんことになりて来るぞ。九月四日、一二か三。ひつぐ

## 第十二帖（一一九）

遠くて近きは男女だけではないぞ、神と人、天と地、親と子、喰べる物も遠くて近いがよいのざぞ、カミそまつにすればカミに泣くぞ、土尊べば土が救って呉れるのぞ、尊ぶこ

と今の臣民忘れてゐるぞ、神ばかり尊んでも何にもならんぞ、何もかも尊べば何もかも味  
方ぞ、敵とうとべば敵が敵でなるなるのぞ、この道理分りたか。臣民には神と同じ分靈<sup>わけみたま</sup>  
さづけてあるのだから、みがけば神になるのぞ。神示は謄写よいぞ、初めは五十八、次は  
三百四十三ぞ、よいな。八月の五日、ひつくのか三。

### 第十三帖（一二〇）

空に変わりたこと現はれたなれば地に変わりたことがあると心得よ、いよいよとなりて来て  
ゐるのぞぞ。神は元の大神様に延ばせるだけ延ばして頂き、一人でも臣民助けたいのでお  
願ひしてゐうのぞが、もうおことはり申す術なくなりたぞ。玉串神に供へるのは衣供へる<sup>ころも</sup>  
ことぞ、衣とは神の衣のことぞ、神の衣とは人の肉体のことぞ。臣民をささげることぞ、  
自分をささげることぞ、この道理分りたか。人に仕へるときも同じことぞ、人を神として<sup>つか</sup>  
仕へねばならんぞ、神として仕へると神となるのだから、もてなしの物出すときは、祓ひ  
清めて神に仕へると同様にして呉れよ、喰べ物今の半分で足りると申してあるが、神に献  
げたものか祓ひ清めて神に献げると同様にすれば半分で足りるのぞ、てんのぬへん氣つ  
けて居れよ。神くどう氣つけて置くぞ。神世近づいたぞ。九月六日、一二のか三。

### 第十四帖（一二一）

海一つ越えて寒い国に、まことの宝隠してあるのぞぞ、これからいよいよとなりたら、  
神が許してまことの臣民に手柄いたさすぞ、外国人がいくら逆立ちしても、神が隠してゐ  
るのだから手は着けられんぞ、世の元からのことであれど、いよいよが近くなりたら、こ  
の方の力を出して見せるぞ、びっくり箱が開けて来るぞ。八月の七日、ひつくのか三。

### 第十五帖（一二二）

神の国には神の国のやり方あるぞ、支那には支那、オロシヤにはオロシヤ、それぞれに  
やり方がちがふのぞぞ、教もそれぞれにちがってゐるのぞぞ、元は一つであるなれど、神  
の教が一等よいと申しても、そのままでは外国には通らんぞ、このことよく心にたたんで  
おいて、上に立つ役員どの氣つけて呉れよ、猫に小判何にもならんぞ、神の一度申したこ  
とは一分もちがはんぞ。八月七日、一二 ㊦。

### 第十六帖（一二三）

今度の戦すめたらてんし様が世界中知ろしめして、外国には王はなくなるのぞぞ。一旦  
戦おさまりても、あとのゴタゴタなかなか静まらんぞ、神の臣民ふんどし締めて神の申す  
ことよく腹に入れて置いて呉れよ、ゴタゴタ起こりたとき、何うしたらよいかと云ふこと

も、この神示よく読んで置けば分るやうにしてあるのぞぞ。神は天からと宙からと地から  
と力合はして、神の臣民に手柄立てさす様にしてあるのぞが、今では手柄立てさす、神の  
御用に使ふ臣民一分もないのぞぞ、神の国が勝つばかりではないのぞぞ、世界中の人も草  
も動物も助けてみな喜ぶやうにせなならん<sup>とことは</sup>のぞから、臣民では見当取れん永遠につづく神  
世に致すのぞから、素直に神の申すこときくが一等ぞぞ。人間の智恵でやれるなら、やっ  
て見よれ、あちらに外れ、こちらに外れて、ぬらりくらりと鰻つかみぞ、思ふやうにはな  
るまいがな、神の国が本の国ばかり、神の国からあらためるのぞから、一番つらいことにな  
るのぞぞ、覚悟はいか、腹さへ切れぬ様なフナフナ腰で大番頭とは何と云ふことぞ、て  
んし様は申すもかしこし、人民さま、犬猫にも済むまいぞ。人の力ばかりで戦してゐるの  
でないこと位分って居らうがな、目に見せてあらうがな、これでも分らんか。八月七日、  
一二 ㊦。

## 第十七帖（一二四）

昔から生き通しの活神様のすることぞ、泥の海にする位朝飯前のことぞが、それでは臣  
民が可哀そうなから天の大神様にこの方が詫び<sup>ひとひ</sup>して一日一日と延ばしてゐるのぞぞ、その  
苦勞も分らずに臣民勝手なことばかりしてゐると、神の堪忍袋切れたら何んなことあるか  
分らんぞ、米があると申して油断するでないぞ、一旦は天地へ引き上げぞ。八月七日、一  
二 ㊧。

## 第十八帖（一二五）

何時も気づけてあることぞが、神が人を使うてゐるのぞぞ、今度の戦で外国人にもよく  
分って神様にはかなはん、何うか言ふこときくから、夜も昼もなく神に仕へるからゆるし  
て呉れと申す様になるのぞぞ、それには神の臣民の身魂掃除せなならん<sup>いちじ</sup>のぞぞ、くどい様  
なれど一時も早く一人でも多く改心して下されよ、神は急ぐのぞぞ。八月七日、一二の  
㊨。

## 第十九帖（一二六）

神の力が何んなにあるか、今度は一度は世界の臣民に見せてやらねば納まらん<sup>いちじ</sup>のぞぞ、  
世界ゆすぶりに知らせねばならん様になるなれど、少しでも弱くゆすりて済む様にしたい  
から、くどう気づけてゐるのぞぞ、ここまで世が迫りてきてゐるのぞ、まだ目醒めぬか、  
神は何うなつても知らんぞ、早く気づかぬと気の毒出来るぞ、その時になりては間に合は  
んぞ。八月七日、一二 ㊩。

## 第二十帖（一二七）

神の世と申すのは、今の臣民の思ふてあるやうな世ではないぞ、金きんは要らぬのぞぞ、お土からあがりたものが光りて来るのぞぞ、衣類たべ物、矢倉まで変るのぞぞ。草木も喜ぶ政治と申してあらうがな、誰でもそれぞれに先の分る様になるのぞ。お日様もお月様も海も山も野も光り輝いて水晶の様になるのぞ。悪はどこにもかくれること出来ん様になるのぞ、ばくち、しようぎは無く致すぞ、雨も要るだけ降らしてやるぞ、風もよきやうに吹かしてやるぞ、神をたたえる声が天地にみちみちてうれしうれしの世となるのぞぞ。八月の七日、ひつ九のか三ふで。

## 第二十一帖（一二八）

みろく出づるには、はじめ半ばは焼くぞ、人、二分は死、みな人、神の宮となる。西に戦争いくさしつくし、神世とひらき、国毎に、ひふみ、みよいつ、もちよらず、いそ、神急ぐぞよ。八月七日、ひつくのかみふみぞ。

## 第二十二帖（一二九）

十柱の世の元からの活神様御活動になりてあること分りたであらうがな、けもの入れものには分るまいなれど、神の臣民にはよく分りてある筈ぞ。まだだんだんに烈しくなりて外国の臣民にも分る様になりて来るのぞぞ。その時になりて分りたのではおそいおそい、早う洗濯いたして呉れよ。八月の九日、ひつ九のか三。

## 第二十三帖（一三〇）

我がなくてはならん、我があってはならず、よくこの神示ふでよめと申すのぞ。悪はあるが無いのぞぞ、善はあるのぞが無いのぞぞ、この道理分りたらそれが善人だぞ。千人りき力の人が善人であるぞ、お人よしではならんぞ、それは善人ではないのぞぞ、神の臣民ではないぞ、雨の神どの風の神どのにとくに御礼申せよ。八月の九日、一二㊦。

## 第二十四帖（一三一）

今の臣民めくら鬻ばかりと申してあるが、その通りでないか、この世はおろか自分の身体のことさへ分りては居らんのぞぞ、それでこの世をもちて行く積りか、分らんと申しても余りでないか。神の申すこと違つたではないかと申し臣民も今に出て来るぞ、神は大難を小難にまつりかへてゐるのに分らんか、えらいむごいこと出来るのを小難にしてあること分らんか、ひどいこと出て来ること待ちてゐるのは邪じゃのみたまぞ、そんなことでは神の

臣民とは申されんぞ。臣民は、神に、わるい事は小さくして呉れと毎日願ひするのが務めぞ、<sup>ちかよく</sup>臣民は近欲なから分らんので、慾もなくてはならんので、取違ひと鼻高とが一番恐いので。神は生れ赤子のころを喜ぶぞ、みがけば赤子となるので、いよいよが来たぞ、九月十日、ひつ九のかみ。

## 第二十五帖（一三二）

今に臣民何も言へなくなるのぞぞ、神烈しくなるのぞぞ、目あけて居れんことになるのぞぞ。四ン這ひになりて這ひ廻らなならんことになるのぞぞ、のたうち廻らなならんのでぞ、土にもぐらなならんのでぞ、水くぐらなならんのでぞ。臣民可哀さうなれど、かうせねば鍛へられんのでぞ、この世始ってから二度とない苦勞ざが、我慢してやり通して呉れよ。九月十日、ひつ九のか三。

## 第二十六帖（一三三）

天の日津久の神ともうしても一柱ではないのぞぞ、臣民のお役所のやうなものと心得よ、一柱でもあるのぞぞ。この方はオホカムツミ神とも現はれるのぞぞ、時により所によりてはオホカムツミノ神として祀りて呉れよ、<sup>うきせ</sup>青人草の苦瀬なほしてやるぞ。<sup>ふで</sup>天明は神示書かす御役であるぞ。九月十一日、ひつ九㊦。

## 第二十七帖（一三四）

石物いふ時来るぞ、草物いふ時来るぞ。北おがめよ、北光るぞ、北よくなるぞ、夕方よくなるぞ、暑さ寒さ、<sup>みろく</sup>やはらかくなるぞ、<sup>いそ</sup>五六七の世となるぞ。慌てずに急いで呉れよ。<sup>うぶすな</sup>神神様みな<sup>うぶすな</sup>の産土様総活動でござるぞ、神神様まつりて呉れよ、人人様まつりて呉れよ、御礼申して呉れよ。九月十二日、一二か三。

## 第二十八帖（一三五）

おそし早しはあるなれど、一度申したこと必ず出て来るのぞぞ。臣民は近慾で疑ひ深いから、何も分らんから疑ふ者もあるなれど、この神示一分一厘ちがはんのぞぞ。世界ならすのぞぞ、神の世にするのぞぞ、善一すじにするのぞぞ、誰れ彼れの分けへだてないのぞぞ。土から草木生れるぞ、草木から動物、虫けら生れるぞ。上下ひっくり返るのぞぞ。九月の十三日、ひつ九のか三。

## 第二十九帖（一三六）

この方オホカムツミノ神として書きしらすぞ。病あるかなきかは手廻して見れば直ぐ分かるぞ、自分の身体中どこでも手届くのぞぞ、手届かぬところありたら病のところ直ぐ分るであろうが。臣民の肉体の病ばかりでないぞ、心の病も同様ぞ、心と身体と一つであるからよく心得て置けよ、国の病も同様ぞ、頭は届いても手届かぬと病になるぞ、手はどこへでも届くやうになりてみると申してあろが、今の国々のみ姿見よ、み手届いておるまいがな、手なし足なしぞ。手は手の思ふ様に、足は足ぞ、これでは病直らんぞ、臣民と病は、足、地に着いておらにからぞ。足地に着けよ、草木はもとより、犬猫もみなお土に足つけて居ろうがな。三尺上は神界ぞ、お土に足入れよ、青人草と申してあろうがな、草の心に生きねばならぬのぞぞ。尻に帆かけてとぶようでは神の御用つとまらんぞ、お土踏ふまして頂けよ、足を綺麗に掃除しておけよ、足よごれてみると病になるぞ、足からお土の息いきがはりうのぞぞ、臍へその緒の様なものぞぞよ、一人前になりたら臍の緒切り、社やしろに座りて居りて三尺上で神につかへてよいのぞぞ、臍の緒切れぬうちは、いつもお土の上を踏まして頂けよ、それほど大切なお土の上堅めているが、今にみな除きて了ふぞ、一度はいやでもはだし 心ふでもはだし 心ふで踏足でお土踏まなならんことになるのぞ、神の深い仕組ざからあり難い仕組ざから喜んでお土拝めよ、土にまつろへと申してあろうがな、何事も一時に出て来るぞ、お土ほど結構なものないぞ、足のうら殊に綺麗にせなならんぞ。神の申すやう素直に致されよこの方病直してやるぞ、この神示よめば病直る様になってゐるのぞぞ、読んで神の申す通りに致して下されよ、臣民も動物も草木も病なくなれば、世界一度に光るのぞ、岩戸開けるのぞ。戦も病も一つであるぞ、国の足のうら掃除すれば国の病直るのぞ、国、逆立ちしてると申してあること忘れずに掃除して呉れよ。上の守護神どの、下の守護神どの、中の守護神どの、みあの守護神どの改心して呉れよ。いよいよとなりては苦しくて間に合はんことになるから、くどう気つけておくのぞぞ。病ほど苦しいものないであらうがな、それぞれの御役忘れるでないぞ。天地唸るぞ、でんぐり返るのぞぞ、世界一どにゆするのぞぞ。神はおどすのではないぞ、迫りて居るぞ、九月十三日、一二㊦。

## 第三十帖（一三七）

富士とは火の仕組ぞ、渦うみとは水の仕組ぞ、今に分りて来るのぞ。神の国には、政治も経済も軍事もないのぞぞ、まつりがあるだけぞ。まつらふことによって何もかもうれしうれしになるのぞぞ。これは政治ぞ、これは経済ぞと申してゐるから「鰻つかみ」になるのぞ、分ければ分けるほど分からなくなつて手におへぬことになるぞ。手足はたくさんは要らぬのぞぞ、火垂ひだりの臣おみと水極みぎりの臣おみとあればよいのぞぞ。ヤとワと申してあろうがな、その舌に七七 ㄴㄴㄴㄴと申してあろうがな。今の臣民自分で自分の首くくるやうにして



あるのぞ、手は頭の一部ぞ、手の頭ぞ。頭、手の一部でないぞ、この道理よく心得ておけよ。神示は印刷することならんぞ、この神示説いて臣民の文字で臣民によめる様にしたものは一二三と申せよ。一二三は印刷してよいのぞぞ。印刷結構ぞ。この神示のまま臣民に見せてはならんぞ、役員よくこの神示見て、その時によりその国によりてそれぞれに説いて聞かせよ。日本ばかりでないぞ、国々ところところに仕組して神社つくりてあるから、今にびっくりすること出来るのぞぞ、世界の臣民にみな喜ばれるとき来るのぞぞ。五六七の世近づいて来たぞ。富士は晴れたり日本晴れ、富士は晴れたり日本晴れ。善一すぢとは神一すじのことぞ。この巻を「天つ巻」と申す、すっかり写して呉れよ、すっかり伝えて呉れよ。九月十四日、ひつ九のか三。

(天つ巻了)